

「消化管エコーの診かた・考えかた」

天竜厚生会診療所 湯浅 肇 著
岸和田徳洲会病院腹部超音波室 井出 満

半田内科医会・名誉会長

新 海 眞 行

昭和40年代、胃集団検診の普及と白壁彦夫先生開発による胃X線二重造影法の活用により、全国各地で早期胃癌が発見されはじめていたころ著者の湯浅肇先生は、藤枝市立志太病院内科で消化器疾患の診断と治療に励んでおられた。

白壁先生の指名で、私が志太病院で早期胃癌のX線診断について話題提供させていただいたとき、胃癌の早期発見のコツは圧迫法の活用にあると述べた。また、圧迫不能の部位の病変の描出には、二重造影法に工夫を加えた体位変換が必要と述べた。

このころから、湯浅先生は急性腹炎で来院の患者に超音波検査を行っておられた。絞扼性イレウスの患者に超音波を当ててみると、腸液で緊満した腸係蹄がくっきり見えるのに驚かされ、従来から言われていた常識に疑問を持ちはじめ、病的な状態の消化管は正常では考えられないほど超音波的好条件が揃っていて、よく見えるのに気づかれたようである。圧迫の強弱によって、病変の出没することも知った。良い画像の得られる症例を経験するにつれ、消化管エコーの臨床での有用性を信じて、25年間一貫して超音波による消化管診断の臨床応用を主張し続け、症例報告をしておられた。

湯浅先生と井出満先生との出会い

は、岸和田徳洲会病院腹部超音波室であった。著者らは、消化器科医、外科医、病理医などの協力を得て、超音波による消化管疾患の診断に打ち込む好条件に恵まれた。

本書では、“消化管エコーの考えかた”“診かた(描出のテクニック)”，“消化管疾患の診かた・考えかた”“症状からみたアプローチ”，“症例から学ぶ消化管エコーの実際”，と5つの章から成り立っている。各章には典型的な疾患の画像とシェーマを添えて、検査のコツ、診断のポイントと考えかたをわかりやすく解説している。“まずは痛んでいるところに聴診器代わりに当ててみる”ことからはじめ、視点のおき方と描出テクニックを詳述し、病変の部位を性状により、圧迫の程度の強弱を5段階に分けて、圧迫法の重要性を強調している。消化管エコーは、腹部単純X線検査、CT検査を対比することで、誤診しないように細心の注意で診断すべきと述べている。また、随所に書かれた「ノート」、「コーヒープレイク」は語り口そのままの平明な文章で、読者への心配りは嬉しい。これは、長年若い医師らを教育する中で、著者らの指導経験から生まれたアイディアであると思う。著者らの地道な努力による豊富な経験症例の積み重ねが、自信にあふれた見事な説得力で読者にやさしく解説

されている。日常診療で遭遇する消化管疾患のほとんどが網羅されている。いち早く消化管エコーに着目し、以来25年、多くの知見を得た著者らは、消化管エコーの分野では第一人者である。消化管エコーを開発し、普及させた著者らの地道な努力に敬意を表する。

消化管疾患診断学の進歩はめざましく、X線二重造影法の開発に始まり、X線と内視鏡との併用、そして今は内視鏡主役と変化して、私の医学生のころに得た知識、その後で得た知識と今日では状況は著しく変わっている。天才肌の著者らの努力で、消化管の急性炎症性疾患の診断には消化管エコーは必須となった。したがって、救急医療を担う医師はもちろん、本書の読者対象には、臨床の最前線にいる医師のみでなく、研修医や医学生も加えるべきである。消化管エコーを究める者にとっては、良い教科書ができたものである。

消化器疾患を診断・治療する医療の前線にいる臨床医に一読されることを強くお勧めしたい好書である。

●B5 頁198 図383 写真306 表7
1998 定価(本体5,500円+税)
〒400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)

□ 訂正とお詫び □

本誌 33 巻 13 号(1998 年 12 月号) 1718 頁に掲載された新海真行先生の書評(湯浅肇・井出満著「消化管エコーの診かた・考えかた」)の中に誤りがありました。下記のように訂正し、お詫び申し上げます。

・左段 16～17 行目

(誤) 湯浅先生は急性腹炎で来院の患者に～

(正) 湯浅先生は急性腹症で来院の患者に～

□「胃と腸」編集室 □